

# 偶然の出来事と心理療法

今 西 徹

キーワード：共時性の原理、ブリコラージュ、コンステレーション

## 要旨：

本論文では、心理療法の偶然の出来事を大切に扱うというあり方の背景にある考え方について検討することを試みた。いくつかの偶然の出来事が生じた時、その背景に共時性の原理のような秩序を感じ取り、読みとろうとすることは、心理療法の考え方の一つである。しかし、そのような秩序を実体化してしまわないことも重要と考える。出来事の偶然性を受け入れ、それに開かれていることが心理療法において重要であり、ブリコラージュ的に、あり合わせの素材をうまく組み合わせる作業を行っていく必要があると考えられる。さらには、多種多様な要素の間のつながりを見て、全体像を把握しようとする、コンステレーションを読みとろうとする、心理療法の考え方であるが、そこには機を捉えるということが分かち難く結びついてくる。「今ここ」に生きること、機を見て座を見ることが、偶然の出来事に対する心理療法の姿勢なのではないかと考えられた。

## I. はじめに

心理療法において、「偶然の出来事」が深い意味を持つと感じられることがある。心理療法は意図をともなした人為的行為であり、当然、思い描いた通りに進行することが望ましいはずである。ところが、思いもよらぬ偶然の出来事が、心理療法の方向を大きく動かし、それが功を奏して良い結果をもたらす、ということがある。この場合、これは素直に喜んでいいことなのだろうか、という疑問が生じるかもしれない。つまり、目的を持った人為的行為でありながら、思いもよらぬことが起き、思いもよらぬ結果がもたらされていて、結果的にはそれはよかったと言えるのだが、果たして心理療法の営みとしては評価できるのであろう

か。たまたまうまくいっただけ、ということならば、次は保証されておらず、そのような方法を専門的技法と呼ぶことなどできない、と考えることも可能ではないか。

一方、思わぬ偶然の出来事が生じたために、心理療法がうまくいかず、残念な結果に終わる、という場合もある。この場合、そのような出来事が生じるとは誰にも予測できないことであり、したがってそれはセラピストの過失ではなく、仕方のないことである、と考えてもよいものであろうか。そう考えることができれば、セラピストとしては責任を免れることができ、気楽である。しかしどうもそのように簡単に割り切れないところがセラピストにはあり、それは必ずしも見当違いな考えではないこともある。何らかの偶然の出来事によって心理療法が悪い方向にいった場合、自分自身の理解が至らなかったのではないか、心理療法の流れの中で何か見落とししていたことがあったのではないかと反省することは、まっとうなセラピストのあり方であると考えられている。しかし、これも一般常識的な考えからすると、非常に奇妙なことと言えよう。偶然生じることに對して、セラピストがどうこうできるはずもなく、それに対して何らかの責任を感じるというのは、あまりまともな考え方とは言えないように思われる。

心理療法においては、偶然の出来事を「ただの偶然だから」と切り捨てず、重く受け止める傾向がある。それは一般的には奇妙なことに見える。しかし、ここにこそ、一般常識的な考えとは異なる、心理療法の考え方、そこで働いている論理の独自性、特殊性があると考えられるのではないだろうか。心理療法で働いている論理は、特殊であり、いわゆる近代科学の論理や一般常識的なこの世の論理と相容れないところがある。だからこそ、その論理の働きを反省し、少しでも明らかにしておくことは重要なことと言える。そうした論理に無反省に闇雲に心理療法をはじめとする心理臨床的な活動を行えば、いらぬ軋轢を生み、「これから心理屋さんは」などと他業種から疎まれるリスク

を高めると考える。自分自身が採用している論理について、深く知ること。これが特に現代において、心理療法家に求められていることであろう。

最終的には、心理療法で働く論理をクリアな言葉で社会に対して説明できるようになることが重要である。しかし、そのためには、まずは根本的な理解を深めることが重要であろう。

本論文では心理療法が偶然の出来事に対して現に取っている態度、あるいはとるべき姿勢について考察を深め、心理療法の論理、現実ということの受け止め方、世界観を少しでも明らかにすることを試みる。

## Ⅱ. 共時性の原理

偶然の出来事を心理療法の世界で最初に真正面から取り上げたのは、やはり Jung であろう。Jung (1952 河合・村上訳 1976) は、意味ある偶然の一致を共時性と呼んだ。あちこちで取り上げられてもはや有名とも言える、Jung があげている黄金虫のエピソードを以下に紹介する。

Jung が治療していたある若い女性は、その頑なな合理主義的態度のために心理療法が進展していなかった。ある時女性は、自分が黄金の神聖甲虫を与えられる夢を見た。彼女が Jung にその夢のことを話している間、Jung は閉じた窓に背を向けて座っていた。突然、Jung の後ろでやさしくトントンとたたき音が聞こえ、振り返ると飛んでいる一匹の虫が外から窓ガラスをノックしていた。Jung が窓を開けてその虫が入ってくるのを宙で捕まえると、それは神聖甲虫に相似した黄金虫であった。これをきっかけに、この女性の変容の過程がついに動き出すことになった。

女性が黄金の神聖甲虫を与えられる夢を見て、それを面接の中で話していたことと、面接室の窓から黄金虫が入ってきたこととの間には、なんら因果的な連関は認めることができない。しかし、この出来事はクライアントの女性に大きなインパクトを与え、心理療法の過程の中で非常に重要な意味を持つことになったのである。この出来事をただの偶然として切り捨ててしまえば、この心理療法の重要な要素を取りこぼしてしまうことになるであろう。現代の心理療法（特に深層心理学的アプローチによる心理療法）においても、その過程の中で印象的な偶然の出来事が生じた場合、

多かれ少なかれその出来事の意味を考えることがなされると考えるが、そのような考え方の礎を Jung は築いたとも言えるのではないだろうか。

夢と面接中に黄金虫が部屋に入ってきたこととの間に、因果的な連関はないけれども、そこに非因果的な連関があり、そこに何らかの意味があると Jung は考えた。そして、あらゆる事象を因果関係によって説明しようとする因果性の原理に対して、それでは説明できない事象があり、そこには因果性とは異なる別の秩序、原理があるのではないかと考え、それを共時性の原理と呼んだのである。

共時性の原理は、相当に難解な考えであり、様々な解釈を許すものであるようにも思える。しかし、意味ある偶然の一致の背景に、因果的な連関とは異なる何らかの秩序の存在を想定しているということは言えるであろう。そして重要なのは、何らかの二つの出来事が同時に起こるということと、そこに意味があるということである。「因果性の原理は、原因と結果との間の結合が必要であると主張する。共時性の原理は、意味のある偶然の一致が、同時性と意味とによって結ばれていることを主張する (Jung, 1952 河合・村上訳 1976, p.94)。」

ところで Jung は、現代物理学と共時性の原理を関連づけて論じてもいるが、現代の Jung 派の分析家である Cambray (2009) は、Jung の時代に始まりつつあり、Jung 以後にさらに展開した科学理論をも視野に入れて、場の理論、複雑系と創発、自己組織化といった諸理論と共時性の原理との関連を捉え直している。その中で、共感や共鳴の生じる心理療法の場においては、個々人の心は閉じられたシステムではなく、相互作用が生じる場、強弱多様な結びつきをもつネットワークに開かれており、そのために自己組織化や創発が生じうるのだとしている。心理療法において重要な契機となることがある共時的な出来事も、この文脈で捉えることができるのである。ここで、Cambray (2009) が提示している事例を要約して以下に紹介する。

クライアントは 30 代前半の男性で、強迫性障害に悩まされている。心理療法開始後、約 1 年たったころ、クライアントの都合でいつもの時間ではなく、その日の最終の時間枠に変更して面接した回があった。このクライアントは、特に感情に関ることについて自己表

現できないクライアントであり、面接中セラピスト (Cambray) は閉じ込められて身動きが取れないといった感覚を持つことが常であったが、その日の面接はそれがいつもよりひどく、セラピストにとって骨の折れる時間となった。その面接の終了間際、驚くべきことにクライアントはクローゼットの中の人物というイメージを含む夢を報告した。時間がなかったため、そのイメージについて連想したり探求したりすることはできなかった。面接終了後、セラピストは疲れ切っており、車を運転して帰宅する前に、横になって休まなければならなかった。インフルエンザになりかかっているような徴候があったが、次の日にはすっかり回復した。

次の面接で、セラピストはクローゼットの中の人物のイメージへの共感を通して、自らの身動きの取れない感覚をより直接的に体験できるようになり、クライアントと夢のイメージについて探求した。セラピストは、前回感じた身動きが取れず不安な感覚をクライアントに伝え、夢のイメージと何か関係あるかもしれないと、自問するように言った。

クライアントは、夢のクローゼットの中の人物は子どもであると言い、その子どもと同じ年の頃、セラピストが前回感じたのと同じような症状を含む特殊な病気にかかっていたことを語った。実はセラピスト自身、おおよそ同じ年齢の頃から、クライアントのものとは異なるが、深刻な病気にかかっていた。その後の分析で、夢の子どもはクライアントが自然な自発性の大半を失った人生のある時期を表象していることが理解されていき、身体レベルにまで固定化されていた強迫症状に取り組んでいくための出発点となった。

以上が、Cambray の事例の概要である。Cambray はここで、クライアントとセラピストの無意識どうしが共鳴し合うコミュニケーションの通路の重要性を強調している。その通路を通してまず、「感情の伝染」ともいうべきことが生じ、共感の中でも感情の共鳴という側面が働いて、心や身体に影響を及ぼすのである。この事例においても、クライアントの感情表現のできなさ、自発性の欠如にセラピストは意識レベルだけではなく、無意識、そして身体レベルで共鳴しており、様々なレベルにおける相互作用が生じていたと思われる。そのような場からの創発として、クローゼットの中の子どもというイメージが生じ、そのことをきっか

けに心理療法が展開していく。さらに、奇妙な事に、クライアントとセラピストともにクローゼットの中の子どものとおおよそ同じ年齢の頃に病気であったという共通点があったことが明らかになる。深い地下で両者がつながっている、同じ地平を共有しているように感じられるのである。このような関係を土台として、クライアントは深刻な強迫症状に取り組むという困難な仕事を進めていくことができたのであろう。

Jung (1952) の先の事例における黄金虫のエピソードも、このようなクライアントとセラピストの相互作用の文脈で読みとることも可能であるように思われる。意識を通したコミュニケーションは、あまりうまくいかず、セラピストが停滞を感じている状態であった。しかし、詳しい記述はないものの、セラピストがクライアントと懸命に関わろうとする中で、おそらくどこか無意識の通路が通じ、そこで交流が生じたことが、クライアントの夢見につながり、面接中の偶然の出来事にもつながったのだらうと想像される。

このように、心理療法において生じた偶然の出来事は、その意味を問うことができるということを、Jung の共時性の原理という考えは示したと言える。そして、それは、潜在的にせよ顕在的にせよ、現代における心理療法を支えている考えの一つなのではなかろうか。

### Ⅲ. 出来事の偶然性

前章では、心理療法において偶然の出来事に意味を見出している事例を参照した。しかし、当然のことながら、心理療法の過程で生じる全ての偶然の出来事に意味を見出すことは不可能であらう。そもそも、この世界で生じるあらゆる出来事は、偶然生じているのだ、と考えることも可能である。ある特殊な偶然の出来事から、あらゆる出来事の偶然性に目を転じると、何か恐ろしい無秩序が顔を出してくるように思われる。全てのことが偶然である、と考えると、そもそもあらゆることが無意味、ともなりうる。

九鬼 (1935 岩波書店文庫版 2012) は、偶然性について次のように述べている。「偶然性とは必然性の否定である。必然とは必ず然か有ることを意味している。すなわち、存在が何らかの意味で自己のうちに根拠を有っていることである。偶然とは偶々然か有るの



意で、存在が自己のうちに十分な根拠を有っていないことである。すなわち、否定を含んだ存在、無いことのできる存在である。換言すれば、偶然性とは存在にあって非存在との不離の内的関係が目撃されているときに成立するものである。有と無との接触面に介在する極限的存在である。有が無に根ざしている状態、無が有を侵している形象である（九鬼、1935 岩波書店文庫版 2012, p.13）。」

一つの存在が、偶然、たまたまそこに存在しているのだと考えると、その存在が存在していることに必然性はないことになる。根本的に考えると、全ての存在は偶然、たまたまの産物と言える。そうすると、あらゆる存在は存在しなかった可能性と背中合わせにあり、必然的な意味は持たない、あらゆる存在は無に根ざしているのだということになる。一方で、自分自身がそもそも存在しなかったこともあり得たのであり、そうであるならその存在に意味など無い、というふうに考えてしまうと、人はなかなか生きづらい。何らかの形で自分自身の存在に意味や必然性を見出さないと、人は生きていきにくい。自分の存在だけではなく、あらゆる物事について、必然性のない世界に人間は生きていけない。偶然性と必然性は表裏一体であり、一方の極に行くと反対の極に反転するようなどころがある。

例えば、人が自分の存在を無限とも言える偶然の出来事の集積、その結果であり、奇跡の産物とでも言える存在だと考えるとき、たまたま生まれたのだから意味が無いと考えるのとは全く逆に、そこに畏怖をも伴うような必然性を感じることになるかもしれない。また、Jung の共時性の原理も、偶然の出来事の中に何らかの必然性を見出すことが出発点となって思考が展開されている。

偶然性と必然性の関係が重要であるとする、この世界がすべて偶然性によっていて、無を根拠としているという世界観も、必ずしもネガティブなものとは言えないかもしれない。ここで言う「無」は、東洋の思想、哲学、宗教の核となる「無」や「空」と通じうるものでもあろう。

生きている局面や思考のあり方によって、偶然性と必然性は片方が前面に出てもう一方が背景に退いたり、あるいは両者が結びついたりする。九鬼(1935)は、「目的必然性は因果的偶然性と結合しやすい（岩波

書店文庫版 2012, p.74)。」と述べていて、Jung の共時性の原理もこの一つの例であろう。すなわち、生じた二つの出来事の中に因果関係はなく、因果的には偶然なのであるが、そこに何らかの意味、目的が感じられる、すなわち目的必然性が感じ取られることになるのである。

武術家の甲野善紀は、「人間の運命は果たして決まっているのか、いないのか」ということを深く考えるようになり、「人間の運命は完璧に決まっていると同時に、完璧に自由でもある」という矛盾した二重性こそが真実に違いないという確信を持ったことをきっかけに、この確信を感情レベルにまで高めようと武術の道に入ると述べている（甲野、2011）。「運命は決まっている」と言っても、現実には身体を攻撃された時、思わず反応する、そういった世界に自分の身を置いて、そこで自分の在りようを見つめようと考えたということである。甲野の問いは、「全ては必然なのか、偶然なのか」とも言い換えられ、答えは「全ては完璧に必然であると同時に、完璧に偶然でもある」と言い換えることができよう。常に今この瞬間、「今ここ」に生きる武術において、必然性と偶然性が結合するということかもしれない。

ここで、『正法眼蔵』の「谿声山色（けいせいさんしょく）」でも引用されている、香巖智閑禪師の有名なエピソードを紹介したい（増谷全訳注 2004）。香巖智閑禪師が大瀧大円禪師の門に学んだ頃、大瀧は香巖に「汝は聡明にして博学であるが、注釈のなかから憶えたものでなく、『父母未生以前』、父母のまだ生まれぬ以前から得きたった一句をわがために語ってみるがよい」と言った。香巖はいくたびもそれを試みたが、どうしてもできなかった。ついに年頃集めきたった書籍を焚いて、台所方となり、幾年もたった。香巖が「わたしは身も心も昏く、なお、道うことができません。願わくは和尚、わがために教えたまえ」と言ったところ、大瀧は「わたしは汝のために説くことを辞するものではない。しかし、そうしたならば、きっと汝はのちになってわたしを恨むこととなるであろう」と答えて、教えてくれなかった。そのようにして月日を経るうち、やがて彼は証国師の跡を訪ね、武当山に入って国師の庵のあとに草庵をむすんで住んだ。そこには竹を植えて友としていたが、ある日のこと、路を掃いているとき、石が跳んで竹に当たり、かっと音を立て

た。それを聞いたとき、香巖は豁然として大悟した。

香巖は師匠から、書物によって勉強したものではない、「父母のまだ生まれぬ以前から得きたった一句」を求められ、苦闘する。ここで求められているのは、言葉による「知」ではない。師が言葉で教えることを拒んだことからそれは伺える。それは自分自身で体得する必要がある「知」であり、言葉で教えることは不可能なのである。

掃いた石が竹に当たって音を立てるということは、それ自体は何ということもない偶然の出来事である。しかし、なかなか狙って実現できることでもないであろう。まさに今この瞬間、「今ここ」において生じた偶然の出来事に、香巖は大きな意味を見出したのである。

掃いた石が竹に当たること自体は、因果関係をたどることができる。石が箒に当たって飛ぶこと自体、不思議な事ではない。しかし、なぜその瞬間に、よりによって細い竹に命中したのか、ということについて、突き詰めて原因を探そうとすると、壁に突き当たる。その竹がその場所に植えられて成長するに至った因果系列、石をその角度、その強さで、箒で打つに至った因果系列、香巖がその場所に住むに至った因果系列など、たどるべき因果系列の数にしても、遡るべき時間の長さにしても、究極の原因である  $x$  にたどり着くには無限の道のりがある。「我々は経験の領域にあって全面的に必然性の支配を仮定しつつ、理念としての  $x$  を『無窮』に追うたのである。しかしながら我々が『無限の』彼方に理念を捉え得たとき、その理念は『原始偶然』であることを知らなければならない（九鬼, 1935 岩波書店文庫版 2012, p.161）。」

この「原始偶然」は「父母未生以前」の世界にある。書物から学ぶ知識は、必然性の世界にある。文字で書かれたことは、不変である。この世のあらゆる出来事は文字化し、必然化することが可能である。しかし、文字化された世界をいくら探求しても、「父母未生以前」の無限の世界に触れることはできない。香巖は、石が竹に当たった瞬間に、この無限の世界に、観念としてではなく実体験としての「原始偶然」に触れたのではないだろうか。このような畏怖を感じるような体験は、Jung が指摘している、意味のある偶然の一致、共時的な出来事に遭遇した際のヌミノース性と共通する性質を持つかもしれない。

「谿声山色」には他に、谷の水が夜に流れる音を聞いて悟ったり、桃の花が満開に咲いているのを見て悟ったりするエピソードが紹介されている。ただ谷の水の音を聞いたり、桃の花を見たりしても、悟ることはできない。修行を積み重ねた者が、ついにある境地に達する瞬間に、真の水の音や花の姿が目に入ってくるのである。香巖も、自分の集めた書物を焼いて、台所方として修行僧のための食事の準備を重ねるという修行を積み、ついに一人で山の庵に暮らすということの果てに、石の音が、言葉に支配された必然性、同一性の世界のものとしてではなく、それそのものとして、「父母未生以前」の現実そのものとして入ってきたのであろう。それは、言語で構築された必然性の世界が解体され、無限の彼方にある「原始偶然」に触れるということ、言い換えれば、高次元の必然性に触れるということでもあるのではないか。そしてそのようなことが生じるためには、内的世界の過程と外的世界の出来事の時間的な一致、今まさにこの時、ということが重要になっていると考える。

#### Ⅳ. ブリコラージュ

あらゆる出来事は偶然に生じるのだ、と出来事の偶然性を認める立場をとった場合、心理療法においてクライアントが語ったり表現したりすることも、その時その場で一回限りの出来事として、偶然生じる、と見ることができる。常識的には、クライアントは何か話したいことがあって心理療法の場を訪れ、その内容を伝えるのだと考えられるであろう。しかし、実際にはそのようなものではないかもしれない。ある内容を正確に伝えることが重要であるならば、文章にして送るということも可能であるはずであるが、現在の心理療法ではそのような手段が有効であるとは考えていない。それは、面接の「今ここ」の体験こそが重要であると考えられているからであり、そこはやはり偶然性が支配する領域と言える。

クライアントが何をどのように話すか、どのように表現するか、それはその時の流れとしか言いようのないことに支配されており、時には事前には全く話すつもりがなかったことが語られることもあり、そのことが非常に意味を持つ場合もある。心理療法の場での出来事が偶然性に開かれているからこそ、クライアント

は香厳のように「父母未生以前」の無限の世界に触れることができるのである。たとえば Jung の黄金虫のエピソードのクライアントは、非合理的なことを許容せず、まさに合理性、必然性にしがみついているような状態であったところ、共時的な出来事がその殻を破ったのだと言える。

クライアントの表現の全てが偶然性に開かれているとなると、その全てに意味があると言えるし、また逆に、その全てが無意味であるとも言える。Freud(1912)は、精神分析においてセラピストは、「差別なく平等に漂わされる注意」(1912 小此木訳 1983, p.79)をもって、クライアントの語りに耳を傾けるべきであると述べている。語られる素材の意識的な取捨選択をしないということが重要で、セラピストは「無意識的記憶」(1912 小此木訳 1983, p.79)に身を委ねることになる。そのようにして、クライアントの無意識に対してセラピストの無意識が反応できる通路ができていくのである。

こうして心理療法の場合に、可能な限り意識的な選別を免れた多種多様な素材が集められていくことになる。一般には、心理療法の場合においては計画に従って必要な情報が集められ、そのうえで治療方針が立てられるものと考えられているが、実際には、質の高い心理療法の実践のためには集められる素材は意識的な取捨選択を逃れたものである必要があり、それはあらゆる学派や理論を越えて心理療法全般に当てはまることであると筆者は考えている。そこで、このような素材をどのように扱うのか、ということになるが、その方法についても、確実に定まったものがあるわけではない。Jung (1935 小川訳 1976) は心理療法の素材の一つ、夢を扱う際によくわからないテキスト、例えばラテン語やギリシア語、サンスクリットの原文のように扱うと述べている。そこではある言葉が未知であったり、原文がバラバラの断片であったりする。文献学者がこうした原文を判読するために使う方法を、夢に適用するのだというのである。実は夢に限らず、心理療法で提示されるあらゆる素材は、このような意味のわからない原文のようなものとして、扱われるべきではないかと考える。

クライアントは大抵の場合理解可能な言語で話すため、通常意味は分かるものと思われている。しかし、例えば同じ「母親」と言っても、微細に見るならば、

その意味するところはクライアントによって全く異なる。それは他のあらゆる言葉について同様であり、それらが互いにどのように結びついているかを知っていくことは、未知の言語の原文を判読する作業と通じるのではないだろうか。そうすると、そこには多種多様で未知な素材が多数立ち現れてくることとなる。

では、このような多種多様で未知の素材を扱う方法はどのようなものとなるだろうか。Lévi-Strauss (1962 大橋訳 1976) は、いわゆる未開社会には西洋の科学のものとは異なる思考形式があると考え、それを神話的思考と呼んでいる。そしてそれがどのようなものであったかをよく理解させてくれる活動形態が、「ブリコラージュ (bricolage)」であると指摘している。ブリコラージュとは「器用仕事」、「日曜大工」であり、ありあわせの道具材料を用いて自分の手でものを作ることである。神話的思考の本性は、雑多な要素からなるけれども限りある材料を用いて自分の考えを表現することであり、それは一種の知的なブリコラージュと言えるのである。

ブリコラージュで用いられる素材は、知覚、感覚に与えられる感性的な素材であり、神話的思考はそれを用いて論理を働かせようとする。したがってその論理は、知覚と概念の中間で働くことになる。Lévi-Strauss (1962 大橋訳 1976) によると、知覚およびイメージと概念の中間に位置する媒体は、「記号」である。中沢 (2016) によると、科学的思考が用いる抽象的な「概念」とは異なり、「記号」は「ゆらぎ」や「ずれ」をはらむため、ブリコラージュによる表現には完成がなく、どんどん変形を重ねていって、豊かな文化の世界が形成されることになる。

心理療法で働かされる思考形式も、まさにブリコラージュと言えるのではないか。そしてそこで用いられる媒体は「記号」であり、そのため心理療法の論理には科学的思考のような厳密さがないとも言えるが、それゆえ豊かな世界を展開できる可能性を持っているとも考えられる。それは、Jung の夢素材に対する扱い方のように、その都度原文を判読するようにして明らかになる世界である。そしてそれらは、違う文脈の中では同じ意味を持つとは限らず、常に文脈を読み解いて、他の要素との関連で読んでいく必要があるのである。これが心理療法における理解、心理学的理解の本質ではないだろうか。



また、心理療法における素材は、「差別なく平等に漂わされる注意」によってできる限り取捨選択されずに集められるが、実際にはクライアントが語られたこと全てを素材とするわけにはいかず、無意識的記憶によって選別され、最終的に意識に上るものとしては、ある程度限りある材料が手元に残っていくことになる。Lévi-Strauss (1962 大橋訳 1976) によると、ブリコラージュで集められる素材は、「まだ何かの役に立つ」という原則によって集められ保存された要素でできている。「とりあえずその用途や実用性がわからないもの」が無数にあるなかで、なぜそれが「何かの役に立つかもしれない」とわかるのか。内田 (2010) は、ここには、その用途と実用性を先駆的に直感する能力が関係しているのではないかと述べている。Lévi-Strauss が当時のフランスの思想界にあって徹底的に戦略的な著書であるはずの『野生の思考』の冒頭で、わざわざブリコラージュを取り上げているその意味は、「先駆的な知」の大切さを教えているということではないか、と言うのである。

心理療法においても、セラピストにとって、意味が分からないものの、「何か大切そうである」という感覚は重要である。そうやって素材を集めるうち、事後的に素材どうし、要素どうしのつながりが見えてきて、全く新しい意味が浮かび上がってくるということがある。そこに至って、「何か大切そうである」という感覚、先駆的な知の妥当性が確認されるのである。

心理療法にとって、このようにありあわせの素材、偶然手に入った素材を用いて考えるということは、非常に重要と考える。情報豊かな現代にあっては、ともすれば外から素材を輸入して用いたくなるからである。クライアントも「何か良い方法」を求めて心理療法の場を訪れることも多いが、セラピストはあくまで限られた手持ちの材料しかないこと、つまりは他でもないそのクライアントとセラピストとの間で生まれた素材しか用いることはできないことを十分に認識して、クライアントにもそれを納得していってもらわないといけない。万人にとっての良い方法や知識など、どこにもないということを、心理療法のセラピストが一番わかっていて、肚を決めている必要がある。その意味でも、ブリコラージュの考え方は非常に参考になるものと思われる。セラピストは、いわばジャングルに生きる人々と同じ気持ちで心理療法の場に臨むとい

いのではないだろうか。

## V. コンステレーション

偶然手に入って、何か大切そうということでセラピストの記憶や記録、クライアントとセラピストに共有される話題などにとどめられた素材は、つながり合い、何らかのひとつの全体的な形を浮かび上がらせてくる。

河合 (1993) は Jung の「コンステレーション (Constellation)」という概念について紹介している。コンステレーションとは、星座のことである。星座というのは、本来関連のない星どうしにつながりを見出し、そこに全体としての形を見出し、さらにそこから神話を紡ぎ出したものである。Jung は、初期にはコンプレックス、次いで元型について、それらがコンステレートする、という形でこの用語を使用しているが、河合 (1993) は特に、コンステレーションを読むということ、何か印象的な偶然の出来事がいくつか生じたときなどに、何がコンステレートしているのか、という問いを立て、全体的状況を読みとろうとする心理療法のセラピストの姿勢の重要性を強調しているように思われる。

心理療法でクライアントが表現することや、様々に生じてくることなど、多種多様な要素の間につながりを見出し、全体的状況を把握しようとすることは、このコンステレーションを読みとろうとすることと断言していいと考える。しかし、ここで、それぞれの要素が、本来関連がないかもしれない、ということも重要なことと考える。Lévi-Strauss は来日した際の講演にて、人類学について、初期の天文学のようなものであるとして、次のように述べている。

「…人類学は、ごく初期の天文学に似ています。私たちの祖先は、望遠鏡も、宇宙についての知識もなしに、夜空を眺めました。星座に名前をつけて、一切の物理的現実と無縁な、星のグループを認めました。各々の星座は、人の目が同一の面に見る星で構成されているのですが、地球からの距離はまったくばらばらです。その距離の思い違いは、観察の対象が観察者から離れていることに由来しています。けれども、この思い違いのおかげで、天体の見かけ上の動きの規則性が、極めて早い時期に認識されたのです。何千年ものあいだ、

現在にいたるまで、星座の知識によって、人間は季節の到来を予測し、夜の時の経過を測り、洋上で方角を知って来ました (Lévi-Strauss, 2011 川田訳 2014, pp.15-16)。」

星どうしは、地球から見るとつながって、一つの形を浮かび上がらせているように見えるが、実際にはそれらの星の地球からの距離は全くばらばらであり、存在した時間さえ共有していないかもしれず、互いに無関係である。しかし、それにもかかわらず、そこに見かけ上のつながり、形を見出したおかげで、人間は季節の規則性や洋上での方角を知ることができたのである。

心理療法におけるコンステレーションも、そこに浮かび上がってくる形、つながりを、あくまで一つの視点から見た形に過ぎないことを忘れないことが重要であると考え。その形やつながりを実体化して、いわゆる「客観的な現実」と混同することは危険である。別の視点から見ると、異なった形が浮かび上がることを、時間の経過とともに形やつながりも変化することを理解しているべきであろう。そこに見える形やつながりが、見かけ上のもの、一種のファンタジーであるとしても、それによって我々がより深く現実と関わることができ、最終的にクライアントの利益になるということが重要なのである。

このようなコンステレーションを生み出す源は、「無」とでも言うべきものであろう。先述の Jung の共時性の原理も、意味ある偶然の一致の背景に、因果性とは異なる別の秩序を想定しているが、その秩序に関連するものとして中国の老子の考えである「道 (タオ)」や「無」をあげている。そして、それを「意味」や「目的」と解釈している。「無というのは明らかに『意味』ないし『目的』であって、それがただ無とのみ名付けられるのは、それが感覚の世界に現れることなく、ただその組織者であるにすぎないからである (Jung, 1952 河合・村上訳 1976, p96)。」そして、二つの偶然の出来事が、因果性ではなく、この「意味」によって結ばれていることを重視しているのである。

したがって、コンステレーションを見る場合にも、そこに何らかの「意味」や「目的」を読みとることになる。ここが非常に微妙なところであると、筆者は考える。Jung の言う「組織者」は、やはり一神教の神のような、一者を想定しているようにも感じられる。

それは、今は無理でも最終的には人間が言語的に把握することも可能となるかもしれないような、同一性が支配する世界である。一方、「無」とは、例えば掃いた石が竹に当たって音を立てたり、谷の水を聞いたり、桃の花を見たりすることを通して体感されるものであり、その一瞬に「意味」や「目的」を感じることはあっても、それを人間的に言語で把握すること、同一的なものとしてとどめておくことは不可能である。「無」は「無」であり、意味や目的が生成される根源であると同時に、全く無意味で無目的であるからこそ「無」なのである。そこには人間が把握できない世界、非人間的で無秩序な世界が広がっている。

心理療法において、全体的状況を見て、コンステレーションを読み、そこに何らかの方向性、意味や目的を見出すことは重要なことであるし、それがいわゆる「見立て」と呼ばれる行為であろう。しかし、その見立ても、無に根ざしていることを忘れないこと、実体化してしまわないことが必要である。そうでないと、柔軟に絶え間なく見立てを修正していくということができないであろう。そのためには、無意味や無方向性、無秩序をも含んだ「無」ということに、開かれていることが大切であるように思われる。

ここで、「今ここ」という瞬間を捉えること、「機」ということが重要な要素となると考える。例えば、掃いた石が竹に当たるとするのは、まさに今この瞬間という体験であるし、そこで衝撃を伴って香巖が悟ったことは、機を捉えることさえできれば自由自在なのであり、世界は無限に広がるのだ、というようなことだったのではないだろうか。また、心理療法において「今ここ」や機を捉えることが決定的に重要なことは、あまりに明らかである。

Jung (1952) は、先述のように、共時性の原理は、意味のある偶然の一致が意味に加えて「同時性」によって結ばれていると言っている。この「同時性」ということは共時性の原理にとって難解な要素であり、二つの出来事が「同時に」生じるという定義があることによって、概念に矛盾が生じることになる。例えば、予知夢のような現象も Jung は共時的な出来事に含めているが、この場合、夢を見るという出来事と、その内容が現実において実現されるという出来事は、同時には生じていない。共時性の概念を Jung が練り上げていくうえでの重要な協力者であった物理学者の Pauli



も、1949年6月28日のJungに宛てた書簡の中で、「共時的」という言葉へ時間概念を入れ込むことに難色を示している。それでもなお、Jungは「同時性」を概念に含めることを断念しなかった。老松（2016）が指摘しているように、相対化された空間や時間において生じる一致も取り入れるように、1951年から1955年にかけて、共時性の定義は大きく変化しているが、これはJungの苦心の跡を示すものであろう。

ここまでJungが時間概念を入れ込むことにこだわったことも、Jungの構想における「機」ということの重要性を示すのではないだろうか。因果的な連関とは異なる共時性の原理という秩序は、実体的に静的に存在する秩序ではなく、ある瞬間に、無から一気に立ち現れてくるような秩序なのではないだろうか。

川嵯（1998）は、心理療法の転機となるような偶然の出来事、「ハプニング」について論じている。川嵯によると、「ハプニング」とはセラピストやクライアントの「読み」を裏切るもの、つまりはその意味体系に収まりきらないものであり、これを収めうるように意味体系が変わることこそが、心理療法で重視される「変化」の根底にある。つまり、思いもよらぬ「ハプニング」を起点として、セラピストやクライアントの「読み」、意味体系に変化が起こる、というのである。

川嵯（1998）の「ハプニング」も、恐らく「機」を捉えることによって「無」に触れる、ということではないかと考える。それは、これまでの土台を揺るがし、根本からの変化をもたらすような体験と言える。一方で、思いもよらないことが生じているのに、何ら変化をもたらさないこともある。心理療法において偶然の出来事に遭遇し、そのことによって読みが変わる、意味体系全体に変容が生じることもこそが、機を捉えるということであるとも言えることができるだろう。「今ここ」に生き、機を捉えることと、状況の意味を読むこと、さらにはコンステレーションを読むことは、分かち難く結びついているということではないだろうか。

河合（1993）は、コンステレーションについて説明する中で、長新太の『ブタヤマさんたらブタヤマさん』という絵本を取り上げている。この絵本では、ブタヤマさんという、ブタともチョビ髭を生やしたおじさんとも、なんとも形容しがたい奇妙なキャラクターが、虫取り網を手ひたすらチョウを追いかけていて、背後から巨大な化け物が迫っていても全く気づかない、

というパターンが繰り返される。そして時折ブタヤマさんは後ろを振り返るのだが、その時には何もいなくて、そよそよと風が吹いているのである。この絵本を紹介しながら河合は、コンステレーションを見るということは、いい時に後ろを見ないとだめだと述べている。また、背後から来るものの気配を悟るということも、コンステレーションを読むことに大に関係しているのではないかと、とも言っている。

河合（1993）にとっても、コンステレーションを読むことと機を捉えることは、分かち難く結びついているのだと考えられる。またそれに加えて、背後から来るものの気配を悟るということも述べていて、興味深い。コンステレーションを読むことは、先述のように「無」ということに触れることと関係していると考えられるが、そのためには、目に見える「有」にとらわれていてはならず、背後の気配に耳を澄ませるような態度が必要となろう。

内田（2021）は柳生宗矩の『兵法家伝書』を引用して、「機を見る、座を見る」ということを述べている。機とは時間、座とは空間のことであり、自分がいるべき時にいるべき所にいて、なすべきことをなすということが、武道修行の目的であると言う。「機を見る、座を見る」ことはそのまま、河合（1993）の言うような、コンステレーションを見ることの説明としても通用するのではないかと。そしてこれはそのまま、心理療法の仕事の本質を表現していると考えられる。

## VI. 結論

本論文では、偶然の出来事をめぐって心理療法が採用している考え方について、検討してきた。偶然の出来事を「たまたまのこと」とおろそかにせず、大切にするというあり方そのものに、その心理療法の考え方が凝縮されている。

いくつかの偶然の出来事が生じた時、その背景に共時性の原理のような秩序を感じ取り、読みとろうとすることは、特に深層心理学的なアプローチをとる心理療法において重要なことであろう。なぜこのようなことが生じたのだろうか、その意味と目的を考えるのである。そしてそこには、クライアントとセラピストの相互作用ということを含めた、非因果的に連関するいくつかの要素を見つけることが可能であろう。しか

し、そこで見出された意味や目的にあまりとらわれな  
いことも重要であろう。そうしたことを実体化してし  
まうと、その心理療法の中での見立ての修正がしにく  
くなるし、長い目で見た経験の積み重ね方としても、  
似非科学的理論や宗教的なドグマにも似た信念を確固  
たるものとして構築していくといった、妙な方向に  
行ってしまう危険を感じる。さらには、ヌミノースな  
体験など、超越性といったことを重視し過ぎることに  
も、同様の危険があるように思える。

考えてみれば、出来事は全て偶然に生じるとも言え  
る。出来事の偶然性を受け入れ、それに開かれている  
ことが心理療法において重要であろう。心理療法でど  
のようなことが語られたり表現されたりするか、さら  
にはどのような内容を心理療法の素材として用いるこ  
とができるかも、偶然性に関わっており、心理療法で  
はブリコラージュ的に、あり合わせの素材をうまく組  
み合わせて作業を行っていく必要があると考えられ  
る。

さらには、多種多様な要素の間のつながりを見て、  
全体像を把握しようとする、コンステレーション  
を読みとろうとすることも、心理療法の重要な作業と  
なるが、そこには機を捉えるということが分かち難く  
結びついてくる。「今ここ」に生きること、機を見て  
座を見ることが、要するに心理療法の作業であり、偶  
然の出来事に対する心理療法の姿勢なのではないだろ  
うか。

論文というものは、論理を重ね、必然的なものとし  
て構築していくのが正しいあり方かもしれない。少な  
くとも、論理の流れに必然性を感じさせるものである  
べきであろう。しかし、実際には何を考え、どのよう  
な素材に会うかということは、偶然性に関わっており、  
当然論文とその論の組み立ても偶然そのようになった、  
という部分があるのがその本質であろう。心にある  
ことを全て表現することは不可能である。手持ちの  
材料で表現するしかない。本論文は特に偶然手に入っ  
て、何かの役に立ちそうと思われて集められた雑多な  
素材を組み合わせたブリコラージュ的要素が強いよう  
に思われる。テーマについて包括的に文献を網羅し整  
理するということからは程遠いスタイルを取ることと  
なったが、これも心理療法についての論考らしいところ  
かもしれないと感じている。今後も多種多様な素材  
との出会いを大切にしながら考察を深めていきたい。

## 引用文献

- Cambray, J. (2009). *Synchronicity: Nature and Psyche in an Interconnected Universe*. Texas A&M University Press
- Freud, S. (1912). Ratschläge für den Arzt bei der psychoanalytischen Behandlung. *Gesammelte Werke*, VIII, Werke aus den Jahren 1909-1913.  
(フロイト, S. 小此木啓吾 (訳) (1983) 分析医  
に対する分析治療上の注意 フロイト著作集 9  
(pp.78-86) 人文書院)
- Jung, C.G. (1935). The Tavistock Lectures. *Collected Works*, Vol.18. Princeton University Press, pp1-182. (ユング, C. G. 小川捷之 (訳)  
(1976) 分析心理学 みすず書房)
- Jung, C.G. (1952). Synchronicity: An Acausal Connecting Principle. *Collected Works*, Vol.8. Princeton University Press, pp417-519.  
(ユング, C. G. 共時性：非因果的連関の原理  
ユング, C. G. ・パウリ, W 河合隼雄・村上陽一  
郎 (訳) (1976) 自然現象と心の構造 海鳴社)  
河合隼雄 (1993). 物語と人間の科学 岩波書店  
川崎克哲 (1998). 心理療法場面において生起する  
＜ハプニング＞の意義に関して 学習院大学文学部  
研究年報, 45, 239-258.
- 九鬼周造 (2012). 偶然性の問題 岩波書店 (文庫版,  
1935)
- Lévi-Strauss, C. (1962). *La Pensée Sauvage*. Librairie Plon, Paris  
(レヴィ＝ストロース, C. 大橋保夫 (訳) (1976).  
野生の思考 みすず書房)
- Lévi-Strauss, C. (2011). *L' AUTRE FACE DE LA LUNE, Écrits sur le japon*. Editions du Seuil  
(レヴィ＝ストロース, C. 川田順造 (訳) (2014).  
月の裏側—日本文化への視角 中央公論新社)
- 増谷文雄 (全訳注) (2004). 正法眼蔵 (一) 講談社  
中沢新一 (2016). レヴィ＝ストロース 野生の思考  
NHK 出版
- 老松克博 (2016). 共時性の深層—ユング心理学が開く  
霊性への扉 コスモス・ライブラリー
- Pauli, W., Jung, C.G. Meier, C.A. (Ed.). (1992). *Wolfgang Pauli und C.G.Jung: Ein Briefwechsel*

1932-1958. Berlin und Heidelberg: Springer-Verlag.

(パウリ, W.・ユング, C. G. 湯浅康雄・黒木幹夫・渡辺学(監修) 太田恵・越智秀一・黒木幹夫・定方昭夫・渡辺学・高橋豊(訳)(2018). パウリ＝ユング往復書簡集 1932-1958 ビイニング・ネット・プレス)

内田樹(2010). 武道的思考 筑摩書房

内田樹(2021). 武道論—これからの心身の構え 河出書房新社